

特16
784

通俗
禪學大意

019736-000-1

特16-784

通俗禅学大意

大内 青巒 / 著

M39.5

ABG-0541



251
411

通俗禪學大意

藹々居士 大内青樹述

若し佛教の極意は何であるかと問ふ人があるならば遠慮なく只この禪の外は無
と答へて宜いのである。釋尊御一代五十年の間、八萬四千の法門と色々を説なされた
も結局只この禪の外は無、各宗の祖師方が念佛だの題目だの觀法だの觀念だのと
色々修行の法を指示しなされたのも、結局只この禪の外は無、但その宗派の都合に
依て、或は念佛三昧と名けたり、或は法華三昧と名けたり、色々と言葉は異つても、其の
三昧といふことが即ち此の禪のことである。そこで此の禪のところを三昧、王三昧とも
名けてあつて、即ち都べての三昧の中の王たる三昧であるといふことである。然るに
此の禪といふことを色々考へ違ひする者があつて、或は一種特別なる修行のこと
のやうに思ふたり、又は或る一の目的を達するまでの方便のやうに思ふたりする者
もあり、従がつて其の目的が低くければ、自然に禪を低いことのやうに思ふ者も出來

明治
39 5 14
内文

又其の目的を達した後には用の無いことのやうに思ふ者も出来て、遂に佛法の極意は唯此の禪の外は無いと云ふ本意に背くことになるは、甚だ遺憾なる次第である。

二

且又釋尊御入滅の後に至つて、同じお弟子方の中にも黨派が分れて、同じ小乗教の中だけでも二十派に別れて、議論が喧ましいと云ふほどのことと有つたから、況んや大乘と小乗の間に於ては、お互ひに全たく外道あつかひて議論を致し、一方から大乘は佛説で無いと云ひ、一方からは外道になるとも小乗にはなる勿と云ふほどのこととあつた、其の弊が支那へも移つてきて、佛法が盛んになるに随つて、益々議論が喧ましい、然るに其の喧ましく言ふ所は、皆唯お互ひに言葉の上の議論で、何經には斯う仰せられてあるとか、何論には斯う説かれてあるとか云ふ證ひであつて、實地に佛教の極意と己れの物にする方のことは、疎漏になつたのである、此れは今も昔しも同じことと、誠に歎はしい次第であるが、勢ひの已むを得ぬものと見える譬へば、經論のお説は醫者や藥劑師が病理學だの藥劑學だの治療法だのと云ふ學問をするやうなもので、此の病氣は斯くくくの譯のものであるから、其れには斯れくくの藥を用ゐる箇様な手

術を施こして斯ういふ療治をするものであると云ふやうなことを研究するのである、此れは誠に此上も無い大切なことでは有るけれども、其の學問や研究だけが如何ほどに上達して、醫學の大博士になつたからと云ふても、實地の病人に當つて其の通りの療治をしたことが有るか、と云へば、其れは未だ實地に當つたことは無い、まだ一人も病人を直した事も無いと云ふのでは、何の効も無い徒ら事といふものである、然るに其の尤も肝要なる所は申すまでも無く、病氣を直すと云ふより外は無いので、其病氣が確かに直つて十全健康の身になつたのが、即ち禪である、謂ゆる三昧を得たのである、然らば其の既に三昧を得て禪すなはち佛法の極意に達した姿は如何なるものであるかと云ふに、其れは到底言葉を以て説明の出来るわけのものでは無い、唯その境界に到り得た人と到り得た人との間だけに於て、其の言ふに言はれぬ妙味を感ずるまでのこととて、之を唯佛與佛乃能窮盡すなはち佛と佛とばかり能く御承知のこととであると云ふのである、前の病人の譬喩でも全たく同じこととて、少しも病氣のない壯健な人は、疲れも無ければ痛みも無く、何を飲ても喰べても味が好くて、起居振舞自由に働ける味ひは、決して疾み疲れて苦しんで居る病人に分るものでは無い、唯其

の健康なる人と健康なる人との間だけに、其の妙味を感じて居るのである、其うして其れはモ一決して醫學や藥劑學の領分では無くて、其實は健康なる人間の當然の姿であつて、何も別段に異つたことでは無いのである。

三

そこで教外別傳と云ふ言葉が起つて來る、教といふは釋尊五十年の間の都べての說法乃至代々の祖師方が色々とお説き示し下されてある所の各宗各派の教である、然るに今は其の佛や祖師方の教の外に別に傳ふる所があると云ふのが、即ち禪宗の他宗他派に異なる所であるが、之を又前の譬喩に合せて見れば明かに能く分る事である、即ち教の外に別に傳へる所の目的があると云ふのは、醫學だの藥劑學だのと云ふ學問や療治の方法の外に、別に大切な目的がある、其れは外のことでは無い、壯健で無病息災なる人になるのであると云ふのと同じことである、然らば其の佛祖のお説き示し下されてある經論も疏釋も、全く不用であると云ふのであるかと云ふに、決して其う云ふわけでは無い、承陽大師は三乘十二分教いづれか佛家の家業にあらざらんと仰せられて、如何なる小乘權教の經論でも皆悉く大切であるぞとのお示し

四

である、さりながら其の尤も大切な目的をば忘れてしまふて、其方法手段の議論だけ喧しく云ふて居るのを叱りなされるために、遠磨大師が教外別傳と言はれたまてのことである、然るに又若しも考へ違ひをして、禪と云ふものは釋尊のお説きなされたお經の御趣意とも違ひ、各宗の祖師方がお示しなされる教とも、全く別段なることのやうに思ふたならば、其れは亦た大層な間違ひになるのである、これも亦た前の譬喩で分ること、如何に病氣が直りさへすれば、好い、壯健なる身になりさへすれば、好いと云ふたからでも、其の壯健になり病氣の種を無くしてしまふには、是非ともに醫學や藥劑學の力を憑むより外は無いのである、要する所は、其の方法手段にばかり執着せず、とにかく其の目的を達するのが何より大切な事になるのである。

四

さて其の目的を達した上になつては、前にも申した通り到底説明の出來べきことでは無いに依て、謂ゆる唯佛與佛で決して他人の窺ひ知るべきことでは無い、即ち釋尊五十年の說法の結果、其のお教に據て本統に釋尊と同じほどの悟りを開き、直に釋尊のお許しを受けて在家で申せば、家督相續の惣領になつた人は、摩訶迦葉尊者御一人

てあつたと云ふことである、其れは或時金波羅華といふ花を釋尊に献じた者があつた、釋尊は其の一枝の花をお手にお持ちなされて、靈山に集つて居る多くの弟子たちにお對ひなされ、何とも仰せられず、チラリと其の花を拈つてお見せなされたが八萬の大衆さし措くこと無しとあつて、多くの弟子たちは誰ありて其の意味の分つた者が無く、皆茫然として只不思議なことを成さると思ふだけのことであつた、然るに摩訶迦葉尊者御一人だけが釋尊のお顔を見あげて莞爾とお笑ひなされた、之を拈華微笑と申して謂ゆる唯佛與佛で他人には絶えて合點のゆかない所を、迦葉尊者だけ確かに御合點なされたことが分つたのであるから、其の時に釋迦如來が吾に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門あり、摩訶迦葉に附屬すと仰せられたとある、此れが即ち佛法の極意に達し得た時の姿で、謂ゆる教外別傳の始まりである、其れから阿難陀尊者、商那和修尊者と段々傳はつて二十八代目が達磨大師である、此れまでの所では別に禪宗と云ふ名の附いて居たわけでは無く、唯佛法の惣本家といふやうなわけ、之を附法藏と申したのであるが、達磨大師がお師匠の般若多羅尊者といふお方から御遺言を受けたこともあつて、支那の梁の武帝の時代に始めて支那へお出に

なつて見た所が、前にも申した如く支那の佛法といふものは、只々お經や論部の議論だけは、大層に盛んなこととて、謂ゆる醫者の學問は非常に發達して居たけれども、實地に病人が全快した、無病健康なる人が出來たと云ふことは、幾んど噂にも聞くことが出來ないやうな有様であつて、そこで達磨大師が教外別傳不立文字直指人心見性成佛と言ひ出して、佛教の極意を丸出しに示さねばならぬことになつたのである。

五

然るに其の佛教の極意を丸出しに、即ち其の目的を達し得た姿だけの所と云へば、彼の釋尊が華を拈らせられたのを見て、迦葉尊者が莞爾と笑ふたと云ふ所になるのであるから、直にこゝを立場として、佛教の極意丸出しの宗旨が一つ開けたことに成つたのが、即ち禪宗である、其れであるから、今は禪宗と云へば、淨土宗とか眞宗とか云ふ諸宗と肩を並べて、別に何ぞの目的でもあるものゝやうに思ふて居る者もあるかは、知らぬが、決して其ういふわけでは無い、例へば眞宗に於て一念發起入正定聚、即得往生住不退轉と云ふのが、即ち親鸞上人や蓮如上人が辛苦艱難して弘められた所の目的であるが、即ち其の彌陀の本願を一向專念に頼む心の發つた時、頼む人の心と頼ま

れる佛の心と一致冥合して、一つとも言はれねば別とも言はれない感應が起つたので、釋尊と迦葉との拈華微笑と少しも違はない妙味が顯はれたのである。之を眞宗ては機法一躰と云ふ、即ち頼む衆生と頼まれる本願と一つになつたと云ふのであるが、其の機法一躰になつた所を釋尊は正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門と名けて、其れを摩訶迦葉に附屬せられたと云ふのであるから、眞宗の宗意も約る所は謂ゆる教外別傳の極意に外ならぬのである。他力の極點であると云ふて居る眞宗てさへ、既に其うてあるとしたならば、其他の自力を主張し即身成佛を目的とする眞言天台日蓮と云ふやうな宗旨て教へる所は、皆其の結局する所は悉く此の禪宗の立場に到らねばならぬのである。其れ故に承陽大師は我が傳ふる所は佛法の總府であるに依て、禪宗だの曹洞宗だのと名くべきものでは無いとまで仰せられてある。

六

しかし斯う言ふたならば、又これに反對して、其れは詰り水掛論になる、何れの宗旨ても皆我が宗が佛法の總府である、結局する所は我が宗の安心に到達したのが佛法の極意である、決して禪宗に限つたことでは無いと云ふ人もあらう、其れも一往は尤も

の事のやうであるけれども、何うも其うは言へないわけがある、何故かといふに他の宗派では皆必ず其れくの依經といふものが定まつて居て、例へば天台宗や日蓮宗は必ず法華經とか淨土宗や眞宗は必ず無量壽經とか云ふ、決して動かすことの出来ない定りがあり、八萬四千の法門の中から、或る一つの法門を擇び、五千四十八卷の經文の中から、或る一部の經文を取り、其他の經文はすべて取らないと云ふことになつて居る、其れでは釋尊の惣本家相續と云ふわけには往かず、或る一部分の支店出見世といふことになるのである、然るに此の達磨門下に於ては、最初から或る一部の經文に依るとか或る一つの法門を擇ぶとか云ふのでは無い、前にも承陽大師の言葉も引て置た通り、三乘十二分教いづれか佛家の家業にあらざらんやと有つて、小乗でも權教でも都べての經論を皆捨てないのであるから、達磨宗は何經に依るかとか云へば、法華經とか無量壽經とか云ふのでは無く、一切經五千四十八卷皆悉く據り所とするのである、即ち念佛でも題目でも眞言陀羅尼でも、八萬四千の法門いづれも皆擇ぶ所は無い、唯其の目的とする所の謂ゆる涅槃妙心を獲得することが出來さへすれば、其れで好いのであるから、前に申した本家と支店との譬喩て見れて、支店の商賣

に酒屋もあれば菓子屋もあり、銀行もあれば呉服店もあるとしても、本家の方では純益金さへ多く上れば其れて好いので、決して何の商賣で無ければ成らないと云ふ別け隔ては無いやうなものである。

七

然るに此の話にも亦た反對して、然らば何故に達磨門下に於ては八萬四千の法門の中から別段に坐禪ばかりを擇びて其れを専門にするのであるぞ、一鉢に禪と云ふことは六波羅密の中の一つであつて、此れが決して佛法の全躰を盡すと云ふわけには往かぬては無いか、其れを佛教の極意であるとか、諸宗各派の宗義も結局只此の禪の外は無いか云ふのであるぞ、誠に自分勝手な説では無いかと言ふ人があらうと思ふ、さりながら、其れが抑も間違ひの根本である、此れも亦た前の本家と支店との譬喩て言ふて見れば、支店に於て酒屋をするにしても菓子屋をするにしても、乃至其他に於て何の商賣をするにしても、最初から終局まで必ず一日も欠けて成らぬものは、資本金である、然るに今佛法の資本金、即ち彌陀如來でも釋迦如來でも、乃至天台宗でも、其言宗でも、一日も欠けて成らぬものは三昧である、而して其の三昧を得るの方法

は、念佛三昧もあれば法華三昧もあり、其他色々の名は異なるけれども、其の實は坐禪を以て根本とするのが、三世諸佛の正式である、例へば彌陀如來の五劫の思惟と云ふことも、釋迦如來の六年の御修行と云ふも、只此の坐禪の外は無、然かし其れも只必らず結跏趺坐とか半跏趺坐とか、窮屈に脚を曲げるだけが坐禪では無い、要する所は禪の一字に在るのである、乃ち永嘉大師は行も亦た禪坐も亦た禪語、默動靜躰安然と言はれ、承陽大師は豈坐臥に拘はらんやと仰せられてある、即ち歩くのも禪であれば、寝るのも禪である、饒舌るのも禪であれば、黙つてるのも禪である、運動するものも禪であれば、靜止てるのも禪である、況んや念佛申すのも題目唱へるのも陀羅尼を誦するものも、皆悉く禪であるは申すまでも無いのである、さりながら譬へば孔子も言はれた如く、樂と云ひ樂と云ふ鐘鼓をしも言はんや、即ち音樂と云ふたからても、鐘を鳴らしたり鼓を打つたりするばかりが音樂では無い、雨竹風松と雨の音も風も、虫聲鳥語と虫の鳴くのも鳥の囀るものも、皆天然の音樂には相違ないけれども、人間に於ける正式の音樂と云へば、金石絲竹の五音六律が調子を整ひてこそ、始めて音樂らしいと云ふものである、今また禪も其の通り、すべてが禪に相違は無、いけれども、坐を以て

禪の正行とするのが三世諸佛の定まれる儀式である故に佛法の惣本家に於ては坐禪を以て表看板として、而して其の他の諸善萬行皆悉く洩さないやうにするので、要する所は商賣するのも禪になり、農業するのも禪になり、乃至政治も法律も戦争も娯和も皆其儘に禪の本意に契ふやうにさへなれば、其れが即ち佛法の極意であるから佛は法華經には治生産業皆正法と相違背せずと説かれ、祖師は茶に逢ふては茶を喫し飯に逢ふては飯を喫すと言はれ、開單展鉢屙屎放尿すなはち飯を食ふのも大小便するの、皆是れ佛行の外は無いと云はれてあるのである。

八

さて又禪は六波羅密の中の一つでは無いかと云ふ疑問は、已に前に辯じた所に於て、もはや十分は氷解しなければならぬのであるけれども、此れは禪と云ふ言葉に就ての言葉答めてあるから、尙ほ一往は辯じて置かねばなるまいか、一鉢に禪と云ふことは天竺の禪那と云ふ言葉を略したので、其の事を云へば成るほど六波羅密の中の禪那波羅密から起つたのであらうけれども、今此の達磨門下のことを禪宗と名けたのは、元來門外の他人から呼び初めたので、支那の唐朝の頃に始めて高僧傳を造つた人

が多くの高僧たちの傳を書くのに、色々な部分をした中に、習禪といふ一つの部門を立て、謂ゆる六波羅密の中の禪那を専らに勤めた人たちの傳を書いた、其中へ達磨大師を入れた爲めに、遂に達磨門下のことを他宗から禪宗と稱したのである、然るに達磨大師の教へられたのは、前に諱々しく申した通り、決して習禪といふことでは無いのであるから、既に宋朝の頃に其の辯駁を書いて置かれた高僧もあり、承陽大師は「普勸坐禪儀」に謂ゆる坐禪は習禪には非ず、唯是れ安樂の法門なり、菩提を窮盡するの修證なりとも仰せられてある、即ち達磨門下に於て自から禪宗と名乗つたのでは無く、他宗から誤まつて禪宗と喚んだのである、然るに他門の人が其う言ふからと云ふて、自分からも其う言ふと云ふは、甚だ不見識なことで、譬へは外國人が我が國のことをジャバンと言ふ、我が國は日本といふ立派な國の名があるにも拘はらず、外國人がジャバンと言ふからと云ふて、自分からも我國のことをジャバンと言ふのは、甚だ不見識極つたことであるから、承陽大師の如きは我が達磨門下は佛道である禪宗では無い、然るに若し自から禪宗と稱する者は、佛祖に對して相濟まぬ次第であるに依て、決して禪宗だの曹洞宗だのと言ふては成らぬぞと、誠めなされてあるけれども

議論は議論として實際の所はシヤパンと言はなければ、外國人と交際するのに便利が悪いに依て堂々たる大日本帝國の政府に於て、公然國交上に用ゐる文書にまで、シヤパンと書いて居るやうなもので、承陽大師でも時としては禪宗と言はれたこともあるのは、正法眼藏の辨道話などにも其例があるのである。そこで今は彼の普通に謂ふ所の六波羅密の中の禪那とは、全たく其意味が違ふにも拘はず、已むを得ずして自から禪宗とも禪學とも又は單に禪とばかりも言ふて居るのであるが、其の差別のある所は能く心得て居なければ成らぬのである。

九

然らば之を何と名けるのが適當であるかと云ふに、承陽大師の仰せられる通りに、單に佛道で宜いのはあるが萬々已むを得んければ佛心宗と言ふ方が禪宗と言ふよりも比較的に好いかと思ふ、是れも其實は佛心に限つたことでは無い、佛身も佛語も都べての佛願佛行を全分相承するのではあるけれども、梁の寶誌和尚が武帝に向つて、彼の達磨大師は觀世音菩薩が佛心印を傳ふるために、此の支那へお出てになつたのであると言ふたのが、稍や適當に近い言葉であると申しても宜しいのである、何故

かと云ふに、曾つて釋尊が迦葉尊者へ御附屬の時に、吾に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門あり摩阿迦葉に附屬すと仰せられた、其の實相無相微妙の法門のことを、今こゝて寶誌和尚が言葉を約めて佛心と言はれたのであるからである、乃ち其の佛心といふことが分りさへすれば、自然に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門といふことも分るわけである、然らば其の佛心と云ふは如何なることであるかと云ふに、之を廣く言へば宇宙萬物日月星辰山河草木禽獸虫魚に至るまで、有りと有らぬる都べての物がら事がらの本體を佛心と名けるのである、さて又之を狭く近く別して吾々お互ひの手元で言ふて見れば、吾々お互ひ一切衆生の憎い可愛い惜い欲いと働らく心の本體本性のことを、佛心と名けたのである、即ち宇宙萬物も吾々お互ひも、其本體本性は一つのもので少しも異つたものではないのであるけれども、同じ一つの品も拵へやうに依ては、色々な形象になり又様々な作用を顯はすことは、譬へば金剛石と炭團とのやうなものである、金剛石はダイヤモンドと申して、黄金よりも白金よりも遙かに尊い寶玉であつて、これほど光るものも無ければ、此れほど堅いものも無く、又此れほど價の高いものも無い、然るに炭團と申せば、炭の粉を丸めたもので、眞黒な汚

ならしいもので、誠に脆いもので、一錢に幾つも買へる甚だ安いものである。然るに其の本體はと云へば、金剛石も純炭素と申して少しも他のもの、雜らない炭素の堅まつたものであり、炭團も亦た純炭素で少しも他のもの、雜らない炭素の堅まつたものである。此れは何故に同じ炭素が斯のやうに、一つは明晃々たるダイヤモンドとなり、一つは黒團々たる炭になつたかと云ふに、唯その手續が違ふだけのことである。其手續のことを佛教では因縁と云ふので、宇宙萬物同じ本體の佛心が、因縁次第で佛にもなれば菩薩にもなり、餓鬼にもなれば地獄の鬼にもなる。古人の狂歌に「下駄足駄つくりかへれば釋迦阿彌陀かはればかはるものにぞありける」とも云へば、鬼保師首に掛けたる人形箱鬼を出そうと佛出そうととも云ふてある。畢竟吾々互ひの一念の心の置き所一つで、地獄の火も燃えれば、極樂の光明も輝やくのである。而して其の地獄の火も佛心の燃えるのであれば、極樂の光明も佛心の輝やくのであるから、佛心その物に於ては孰れにしても苦も無ければ樂も無いのではあるが、吾々互ひ人間としては何うであらうぞ、地獄の火も厭ふに及ばず、極樂の光明も願ふに足らぬと云ふ境界に安んずることが出来やうか出来まいか、此れが人生最終の一大問題となるのである。

である。

十

さて其の人生最終の一大問題を何うして解決したものであらうかと云ふに、畢竟吾々互ひが唯此の五尺の身軀に執着して之を我身と思ひ、唯此の憎い可愛い惜い欲しいと働らく情想を執着して之を我心と思ひ、其の我心を思ふやうにし、其の我身を自山に働らかせたいとばかり思ふて、遂に其の我身の本體は何であるやら、其の我心の本體は何んなものやら、少しも知らずに五十年か七十年を犬猫同様に送つてしまふのが凡夫の常態である。其れを佛祖は深く慙れませられて、其の本體本性すなはち佛心の廣大無邊なること、吾々一切衆生が其の佛心に背いて居ること、故に必らず其の佛心を見留めて我と佛心と一つにならねば成らぬこと、又其の我と佛心と一つになる方法手段等を、色々と言葉を盡してお教へ下されたのが、即ち一代時教謂ゆる八萬四千の法門である。然るに其の我と佛心と一つになる方法手段は、其人の機根次第で色々和高いも低いもあり、随がつて其の目的を達し即ち我と佛心と一つに成り得る時期に、遅い速いの差別も多くある中に、前にも諄々しく申した如く、三世諸佛の修行

の正則は坐禪であるに依て、達磨門下は佛法惣體の本家株たる性格を全うするため坐禪を正則として傍はら其他の諸善萬行にも及ぶのである、偕其正則の方法即ち坐禪に依て我と佛心と全く一つになることの出来たのを、大悟とも見性とも言ふのであるが、其様子を承陽大師は身心脱落と仰せられてある、身心脱落といふは之を極めて通俗に申せば、身も心も都べての束縛を離れて、自由自在になつたと云ふことである、何故かと云ふに吾々一切衆生は五尺の身軀、五十年の生命と限りある生活であるから、何事も皆其れに束縛されて自由を得られない、然るに今彼の廣大無邊にして限り無き佛心と一つになつて見れば、限りある五尺のまゝに法界に充滿せる法性法身と一つになり、五十年の生命のまゝに三世通貫の壽命無量と一つになつたのであるから、従前の五尺、五十年に束縛されると云ふことが無くなるのである、さて此の立場に到り得た上には、更に却來退歩と本へ戻つて、其の自由自在の働らきを、五尺、五十年の生活の上に顯はして、朝な夕なの仕ること作すことが、皆悉く廣大無邊なる佛心の活動となる、其の有様を承陽大師は前の身心脱落を逆にして、更に脱落身心と仰せられてある、即ち喫茶喫飯も其儘に佛心の働らきてあり、屙屎放尿も其儘に佛心の働ら

きてあるに依て、十方法界何も彼も都べて佛心ならざるものは無いことになる、斯うなつて見れば別に佛心とも凡心とも異つた名を附けるには及ばない、又別に異つた姿も無いので、花は花のまゝ、好し月は月のまゝ、好い、その様子を承陽大師は、只是れ眼横鼻直なることを認め得て、空手にして郷に還るとも仰せられ、又三年に一聞あり、鶏は五更に向つて鳴くとも仰せられ、又は佛殿僧堂溪聲樹影すべて諸人の爲めに説き畢るとも仰せられてある、此れが即ち佛教の極意であり、人生最終の目的である、但其の溪聲樹影すべてに諸人の爲めに説き畢れる底の道理、諸人果して能く明らかに之を聽き得たりや否や、

咲くもよし散るもよし野の山櫻

たゞ春風にまかせてぞ見ん

藹 翁

通禪學大意了

明治三十九年五月八日印刷
明治三十九年五月十一日發行



不許
複製

著述人

大內青巒

發行人兼
印刷人

今村金次郎

印刷所

株式會社 秀英舍

東京市芝區露月町十八番地

發行所

東京市芝區露月町十八番地
電話新橋三千廿七番

鴻盟社



